

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月16日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21500704

研究課題名（和文） 中年期における親のケアと家族関係についての研究

研究課題名（英文） Study on Care of Parents and Family Relationship in Middle -Aged  
研究代表者

長津 美代子 (NAGATSU MIYOKO)

群馬大学・教育学部・教授

研究者番号：20192239

研究成果の概要（和文）： 中年期における親に対するケアの内実を感情労働や介護の社会化などの概念を用いてとらえ、介護のあり方が夫婦関係、親子関係、きょうだい関係などにどのような影響を及ぼしているのかを明らかにした。計量調査から、介護を肯定的にとらえることは感情労働得点を高めること、男性が男親を介護している場合にはプラスの感情を維持することが難しいことなどが明らかになった。質的調査では、語りにより、介護と家族関係の様子をクローズアップした。

研究成果の概要（英文）： This study examined the reality of care of parents by those in their middle age from concepts like emotional labor, socialization of care and other things, and has made clear how the way of caring has an influence over relationship between husband and wife, between parent and child as well as between siblings. According to a measurement research, it has become clear that thinking positively about caring leads to an increase in the score of emotional labor and that maintaining a positive feeling is difficult in the case that men care their fathers. In a qualitative research, the actual conditions of caring and family relationship were highlighted through narration.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード： 中年期、親の介護、感情労働、介護の社会化、援助態勢、親子関係、夫婦関係、きょうだい関係

### 1. 研究開始当初の背景

平均寿命が伸長する中で、親のケアは中年期の多くが直面する課題となっている。直系制家族規範の衰退と個人化が進行する中で親のケアは、ケアに関わる家族・親族のそ

れぞれの思いや要求がぶつかり合い、ケアの社会化や援助態勢をめぐって家族や親族間に意見の対立が生じやすい。理想としては、介護される親とその家族がともに納得しうるケア態勢が望まれる。そうしたケア態勢を

考えていくうえで、感情労働やケアの社会化概念を活用することが有効である。本研究では、中年期（特に後期）における親に対するケアの内実を感情労働やケアの社会化などの概念を用いてとらえ、ケアのあり方が夫婦関係、親子関係、きょうだい関係などにどのような影響を及ぼしているのかを明らかにするとともに、要介護状態にある親とそのケアの担い手がともに生活の質を保障されるようなケアのあり方を検討する。

中年期における親のケアが家族関係に与える影響について明らかにした研究は乏しい。申請者は、中年期の夫婦関係には、親の介護が影響していると考え、親の介護と夫婦関係についての計量調査を実施した（平成18-20年度科学研究費補助金 基盤C）。その結果、(1)介護経験のある者の方がいない者よりも夫婦統合得点が高いこと、(2)介護援助者として配偶者があげられている方が夫婦統合得点は高いこと、(3)きょうだいについては、介護援助者としてきょうだいだけが挙げられている方が夫婦統合得点は低いことなどが、妻の場合にのみいえることが明らかになった。そして、その理由をインタビュー調査より探った。(1)については、介護を通して自分たちの老後をより具体的に予測することができ、親の要介護状態はいずれ自分たちが迎える老いの姿であることから、夫婦で今をよりよく生きようとする志向が生まれていることが確認された。(2)については、実際の介護援助に関わらなくても、介護をしている妻の悩みや愚痴を夫が聞いてくれるという援助のあり方が、妻の配偶者に対する共感的態度を育んでいることが確認された。(3)については、夫の親を介護している妻というパターンが今なお多く、夫のきょうだい（妻にとっては義理姉妹）からの干渉を夫がうまく調整できていないことが夫婦関係の悪化を招いているのではないかということが示された。本研究では、これらの研究をさらに発展させる。その方法としては、感情労働や介護の社会化などの変数を投入し、中年期における親のケアと家族関係の関連についての研究をさらに精緻化させたいと考える。

## 2. 研究の目的

本研究で特徴的なことは、ケアの内実を感情労働、ケアの社会化、家族・親族の援助態勢、ケアの意味づけなどの変数で把握することにある。そのなかでも特に感情労働とケアの社会化が注目される。感情労働とは目に見えない労働であり、ケアの社会化とは身体介護などの目に見える労働である。Hochschild, A. R. は、感情労働を「相手に適切な精神状態が喚起されるように、自身の感情を誘発したり、抑圧したりしながら自分の

外見上の感情を維持すること」と捉えている。西川(2004、2006)は、感情労働を「感情的知性」「コミュニケーションスキル」「感情管理スキル」「場の設定スキル」に分けてより具体化し、「感情的知性」（相手や自分の感情や立場を理解して、よりよいサービスを提供すること）と「感情管理スキル」（自分のネガティブな感情を抑え、適切な感情を維持すること）が質の高いサービスに関係していると述べている。これらは、ホームヘルパーの調査研究から得られた知見であるが、下夷（第28回家族関係学セミナー配布資料）は、家族でしかなしえない感情労働の可能性を指摘している。

ケアの社会化は、介護保険制度が施行されて進んだが、要介護高齢者の24%は居宅サービスを活用していない（「平成19年 国民生活基礎調査の概況」）。また、2005年の介護保険制度改正により、ケアの社会化に歯止めがかけられ、家族の負担が増し、介護の再家族化が生じているという指摘もある。ケアの社会化のニーズとその充足の度合いを把握することも喫緊の課題といえる。

本研究の目的は、次の5つの課題に取り組むことである。

(1) 先行研究を参考にしながら、家族におけるケア担当者に適用可能な感情労働評価尺度を作成する。

(2) 感情労働評価は、ケアの社会化、家族・親族の援助態勢、家族関係によって異なることを明らかにする。ケアの社会化水準が低かったり、家族・親族の援助態勢が納得のいく形で得られていなかったり、また、家族関係が良好でない場合には、ケア担当者に感情管理の余裕がないため、感情労働評価は低いことが想定される。

(3) ケアをプラスに意味づけている場合には、感情労働評価も高いことを明らかにする。

(4) 感情労働評価、ケアの社会化、家族・親族の援助態勢、ケアの意味づけは、個人化や直系家族制規範の衰退とどのような関連があるのかを明らかにする。

(5) 感情労働評価の高さ、在宅におけるケアの社会化、納得のいく家族・親族の援助態勢、ケアをプラスに意味づけている場合には、良好な家族関係を形成していることを明らかにする。

## 3. 研究の方法

上述の課題を遂行するために、質的調査（2009、2011）と計量調査（2010）を行った。2012年度は、再分析とまとめを行った。

2009年の質的調査では、感情労働尺度を作成しそれに影響する要因を探索的に明らかにするために5ケースを対象とした。この質的調査から得られた知見と先行研究をもとに調査枠組を作成し、2010年、800名を対象

に計量調査を実施した。さらに、介護と家族関係についてのリアリティを語りからクロージアアップするために、2011年、再び質的調査を実施した（対象者は6名）。

計量調査の対象者は、2006年に長津らが行った調査（選挙人名簿より無作為に抽出された夫婦1500組・3000名）で回収され有効票となった797名に、紹介された知人の3名を加えた800名である。質的調査の対象者は、インタビュー調査に協力しても良いと回答した者のなかからいくつかの条件を考慮して選択した（計11名）。

計量調査対象者の有効票は617名で、男女の内訳は、女性329名、男性288名である。女性の年齢は、58歳～69歳で、平均は63.1歳。男性の年齢は、50歳～77歳で、平均は66.1歳である。女性の59%は無職であるが、男性の無職の割合は43%である。きょうだい数の平均は、女性3.9人、男性4.4人である。子ども数の平均は、男女共に2.1人、家族構成で最も多いのは、男女共に「夫婦のみ」で約53%、次に多いのが「夫婦と子ども」で約3割である。結婚年数の平均は、男女共に約38年である。

## 4. 研究成果

### (1) 感情労働の尺度化について

質的調査および先行研究をもとに、感情労働評価の項目群を作成した。因子分析（主成分分析・バリマックス法）の結果、3つの因子が抽出された。それぞれの因子負荷の高い項目群の内容から第1因子を「理解対応」（自分や要介護者の感情や立場をよく理解して要介護者と良い関係を築き、その場に適切な対応ができる）、第2因子を「プラスの感情維持」（やる気を失わないなど、プラスの感情を維持して介護ができる）、第3因子を「マイナスの感情抑圧」（マイナスの感情を抑制して、穏やかな気持ちで介護ができる）とした。

### (2) 感情労働評価に影響する要因

①3つの感情労働評価得点に影響している変数は、「親の介護はものの考え方を柔軟にしてくれる」である。親の介護を前向きに捉えていることが、感情労働評価得点を高めていることが示された。田中（2005）は、ヘルパーを対象にした調査において、ヘルパーのプラスの心理（満足、やる気等）が4つの感情労働スキルのすべてと有意な正の相関があることを明らかにしている。本研究も同様の結果が得られた。

②「介護への関与の仕方」が補助的であるよりも主な介護者として関わっている方が、理解対応得点とプラスの感情維持得点が高くなる傾向がある。主な介護者は、要介護者に対して

さまざまなケアを行うとともに多くの時間をケアに当てることになる。こうした関わりの中で要介護者のことを理解し、ニーズに応じた対応ができるようになる。また、プラスの感情を維持することができるようになるのではないかと考える。

③「別居の親族のパーソナルネットワーク数」が多いと理解対応得点が高い。別居親族とは、自分のきょうだいや配偶者のきょうだい、きょうだいの配偶者、子どもなどである。これらの別居の親族からの情報や支援が、要介護者を理解することにつながり、要介護者のニーズに応じた対応ができるようになるのではないかと考える。

④男性の場合、「自分の母」の介護をしている者の方が「自分の父」を介護している者よりもプラスの感情維持得点が高い。男性は、父親に対してやる気などのプラスの感情を維持することが、母親の場合よりも難しいことが明らかになった。また、女性では、「配偶者の親」よりも「自分の親」の介護をしている者の方が、理解対応得点が高い。女性は、配偶者の親よりも自分の親についての方が、生きてきた歴史や性格をよく理解している。こうしたことから、自分の親を介護している者の方が、よりニーズに応じた対応が可能になっていると考えられる。

⑤介護者と要介護者との性別関係について、男性が男親を介護している場合、他の性別組み合わせよりもプラスの感情維持得点が際立って低い。男性が男親を介護する場合、やる気を失わずにいたり、落ち込んでも立ち直るなどのプラスの感情を維持することが難しいことが明らかになった。本対象者の男性は50～70代で、女性に比べ、家事や子育てに関わる機会が少なく、養護性（幼・弱・老者に気づき、援助する心と力）を培う機会を与えられずに育ってきた者が多いと考えられる。こうした事情から、介護におけるプラスの感情を維持することの困難性が予想できる。

⑥女性の場合、訪問介護（ホームヘルパー）を「利用した」者の方がプラスの感情維持得点とマイナスの感情抑圧得点が高い。デイサービスとショートステイの利用の有無では、有意差が確認されなかった。女性が親の介護を在宅で行う場合、ホームヘルパーの利用がプラスの感情維持とマイナスの感情抑圧に関連しているという知見は注目に値する。ホームヘルパーを利用したことで、要介護者と介護者の二者関係ではなく、要介護者と介護者、ホームヘルパーの三者関係になるため、より多くの情報が入り、人間関係が活性化される。また、ホームヘルパーの支援や励ましは要介護者と介護者の人間関係を柔軟にし、プラスの感情を維持することやマイナスの感情を抑圧することに好ましい影響を与え

る。このように介護保険サービスをうまく活用し、外部資源を在宅介護に取り入れて親の介護にあたることは有効であることが示された。

### (3) 質的調査から明らかにされたこと：親の介護と家族関係等についてのリアリティ

①過去の親子関係・嫁姑関係が親の介護に影響する。

共働き中に子育ての援助をしてもらったという親子関係歴があったり、大切にまたは苦勞をかけて育ててくれたことへの恩返しや感謝の気持ちがある場合は、感情労働の遂行状況は良かった。一方、男性が自分の親を介護している場合で、同居中から嫁姑関係がよいとは言えず、妻が姑から、「自分の産んだ子に面倒をみてもらう。嫁の世話にはならない」と言っていた事例では、妻は、掃除・洗濯・炊事はするが、介護は夫任せで、まったく手を出さないということであった。

②親の介護はきょうだい関係に影響する。

親の介護に直面してきょうだい関係がよくなったという場合、ある特徴が認められる。それは、きょうだいたちが、介護を担っている者に親に関する意思決定を任せ、親を介護してくれることに対して感謝の意を表し、大変な時にはしっかりと支えているということである。男2人と女3人の5人きょうだいで、女きょうだいの末っ子が母親の介護をした事例では、介護者以外のきょうだいは県外に居住しているが、男きょうだいも女きょうだいも泊まりに来て介護者を援助している。

一方、母親の介護をきっかけに女きょうだいの交流がなくなってしまう男性介護者の場合、その原因は金銭トラブルである。介護しているのは、長男である男性介護者であるにも関わらず、母親が女きょうだいに金銭管理を委ねたことが火種となったようだ。女きょうだいたちは、家にはチョコチョコ顔を出していたが、施設に入るとほとんど来なくなってしまうという。

③親の介護は夫婦関係に影響する。

インタビューの対象となった介護者たちの配偶者は、いずれも介護者に協力的であった。介護中は、「いろいろあった」ということであるが、介護を終えたあとの夫婦関係は悪くはない。夫が介護に関わったことにより、介護の大変さを理解して介護者である妻への感謝が生まれたことから、夫婦関係がよくなったといケースもあった。男性が母親の介護をしており、妻は身体介護に関わることがない場合でも、妻は買物・洗濯・掃除などの生活支援は行っており、そのことに男性介護者は感謝の意を表明している。

④介護から一時的に離れることによって介護ストレスを解消する

介護は多くの困難を伴うためストレスが

生じる。それをどのように解消し、介護を継続したかについてみた。「地域のママさんバレー部に所属し、週に2回は練習に行く。」このことは、夫の母親にもっと優しく対応するために必要なことだということである。「友人とランチに行き、介護の経験を話し合い、悩みなどを共有する。」「ボランティア活動に参加すると気がまぎれる。」「若いころからモラロジー(道徳の教え)を勉強している。親孝行や自己反省、思いやりの気持ちが介護にも活かしている。」「友達とゴルフや飲みに行くことで気分の転換をしている。」以上のように、趣味をもったり友人と会ったり自己投入できる何かをもったりして、一時的に介護から離れる工夫をして、介護を担ってきた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①小林由佳、長津美代子「中年期における親の介護と感情労働についての考察」群馬大学教育学部紀要(芸術・技術・体育・生活科学編)、48、pp.217-227、2013、査読無

(<http://hdl.handle.net/10087/7453>)

②長津美代子、小林由佳「中年期における親のケアと感情労働—5 ケースの事例調査を通しての分析—」群馬大学教育学部紀要(芸術・技術・体育・生活科学編)、46、pp.171-180、2011、査読無

(<http://hdl.handle.net/10087/6075>)

[学会発表] (計1件)

①小林由佳、長津美代子「親の介護と感情労働について」、第31回日本家政学会家族関係学部会家族関係学セミナー、2011.10.23、関東学院大学関内メディアセンター(横浜)

[図書] (計1件)

①長津美代子、上武印刷、「中年期における親のケアと家族関係についての研究」2013.3.29、全153頁

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

長津 美代子 (NAGATSU MIYOKO)

群馬大学・教育学部・教授

研究者番号：20192239